

フランス文学科 3年

北原 美和

ジャパノロジー・ゼミ課題

「六畳一間で〈日本〉を問うてみる」

(1)動機・目的

このジャパノロジー・ゼミを通して非常に貴重な経験をする事ができた。各分野において第一線で活躍される講師の方々による〈日本〉について、そして日本に潜む「二項対立」についての個性あふれる講義を受講できるこのゼミには毎回強い刺激を受けていた。しかし、私の中で深まる疑問は「日本を考えるとどういうことか」「ジャパノロジーとはどういう学問なのか」という根源的なものであった。人間は「対立」という概念を用いてしか事物を認識することができないのであれば、日本という国もまた「他国」を通してしか認識することができないのか。それでは日本人はこの「日本文化」や「日本人としての意識」といったものをもはや自明のものとして受け入れており、改めて考える対象として「他者化」することには限界がある以上、日本人が〈日本〉を考えると実際には可能なのかといった漠然とした問いが、私の貧しい理解力・思考能力を超過し、フラストレーションとなっていた。

そうした状況で、課題に際してテーマを決めるにあたって更に感じたのは、「他の学問分野—例えば歴史学や社会学等においても〈日本〉を研究テーマにすることは可能なのではないか、ならば、ジャパノロジーという講義で提出する課題はどのようなものが良いか」という疑問である。この疑問に執着を示しすぎた所為で、どのように自分の問いを課題という形に残せば良いのかわからなくなった。前述のジャパノロジーへの疑問、そして課題に対する疑問で混乱した結果完成したのが、このただ半紙に墨で書き殴ったもの（これを作品と呼ぶには値しないと考えているため以下「紙」と呼ぶ）である。

この紙の制作における意図は「とりあえず一番根本的なところに戻って日本人である私の〈日本〉に対する考えや疑問を素直に書いてみよう」という率直なものである。特に何か結論をだすためでもなく、ただ書いただけである。吐嗟の思いつき（あるいは一種のあきらめ）だったため、現在住んでいるのアパートの六畳の狭い一室で、最低限の道具を使って試みた。とりあえず書いてみ

たら、行き詰まっているジャパノロジーに対する考えに新たな何かがもたらされるかもしれないという淡い、根拠のない期待をもって行なった。

(2)制作にあたって

※1 筆を選んだ理由

：シャープペンシルやパソコン上でのタイプのように書き直しができない点と線がある程度太くはっきりしている点、書くと言う行為を体感したかった点から（書道は未経験のため字当初から流麗な字を書こうという意思は皆無である）。

・制作手順

- ①新聞紙を壁にはる
- ②半紙を壁に固定
- ③自撮り棒、携帯を設置 …※2
- ④撮影開始
- ⑤書く



※2 「自撮り棒」・携帯による撮影

：制作をするにあたり、「映像を残してみよう」という気になった。しかし、本格的な機器は持っておらず、また六畳という狭い部屋において全体の風景を収めるためには、機材は小さなものが良いということで、携帯電話といわゆる「自撮り棒」を使用した。自撮り棒をカーテンロッドに沿うようにガムテープで固定し（図参照）、携帯を設置、内カメラにして撮影するという至極簡素なものである。また延々と同じ行動が繰り返される空疎なビデオになることを回避するため、タイムラプス（早送りの状態で撮影する方法）を利用し、1.2倍速に設定した（それでも1.3分にも渡る長く平坦なビデオになってしまった）。この粗雑な機材設定のせいで、映像にブレや傾きが生じている。

(3)訂正／解説／お詫び

以下には実際に紙に書いた考え・疑問の訂正と解説及びお詫びと弁明を記す。
きゃりーぱみゅぱみゅ：彼女の曲のタイトル『crazy party night～ばんぶきんの逆襲～』のダサさへの怒り／人身事故：本当にどうにかするべきだと感じる。こんなに「死」が日常化していることに誰も恐怖を感じないのか／文系学科削減：人間の「豊かさ」の創造源を奪うことになりはしないか／JPOP：量産的な歌詞への疑問／校則／白：これも特に地方の公立／通勤電車：日本人が「思いやりのある人々」だとは思

えなくなる／絶賛コンテンツ：テレビ、書籍等における近年の「日本礼賛」ブームに日本人はもう少し疑問を持って良いのではないか／ろくでなし子：彼女の活動は逮捕されるほどそんなにたいしたことなのか／「在日」：それほどに誹謗中傷の対象になり得る理由がよくわからない／春画：「…「他の」浮世絵と」に訂正させて頂く。春画自体に興味があるのではなく、現代とは対照的に性に対しておおらかであった昔の「日本」の存在に関心がある／SMAP：皆オジさんであることを忘れてはならない／「信頼のできる国」；廃棄食品横流しはかなりショックであった。もう何も信じられない／マイナンバー：わからない／特定秘密保護法：国民に隠して実現させてしまった感／嫌韓・反中本／安倍総理の本／大学生／携帯ゲーム：こどもからおばさんまで／TOHOシネマズ：途中で思いつかなくなって書いてしまった。意味がわからない。歌舞伎町はいつ訪れてもインパクトがある／謝罪会見：「とりあえずやらなきゃ感」／「ぶっこみジャパニーズ」：この番組はいろんな意味で関心を引く番組である。何故このような軽率な番組をつくれるのか、文化に「正しい」も「間違い」もあるのか、日本の「カレー」・「ナポリタン」はどうなるのか／外国人就労者／難民：〈日本〉が隠す人々／食料自給率と電力問題：覚悟を決めてほしい／ポルノ雑誌：カード式にしてレジ先で交換する方式はどうだろう／2ちゃんねる：インターネットの怖さを感じる／左翼の車：左翼→右翼の誤りである／「お客様は神様」／野次／寺／神社／禅・仏教・儒教・武士道：「日本の根幹」とされていながらも同時に今現在〈日本〉が手放しつつあるものではないかという疑問／献金問題：国民のために誠意を尽くして政治に集中して欲しい／twitter：使い方を学び直して来い／ヘイトスピーチ：喋る前によく考えてから発言して欲しい／渋谷の暴動：公共に迷惑をかけないで欲しい／「すみません」：これはただの個人的な目標／芸能人熱愛：こういう類がトップニュースになることに呆れる／ベッキー：ベッキーだって人間だから間違いは起こす／バラエティ番組／オリンピック：不安しかない。浪費される大金／在特会：あるジャーナリストのこの記事

(<http://america.aljazeera.com/articles/2015/11/30/japan-encounters-rise-in-hate-speech.html>) を偶然読んで本当に怖いと感じた、まず理解してみようという態度にはならないものなのか／怯える美術館：会田誠氏の「檄」の一連の騒動について／クラッチバッグ登校女子：単なる個人的な疑問／デヴィッド・ボウイ／村上隆：この騒動は本当に関心をひかれる。日本人のよくわからないところで現れる「国民意識」？が本当に面白いと思った／「〇〇ジャパン」：今思うと別にそこまで気にしなくてもよいのかもしれない／漢字／子どもの携帯／ネットでのいじめ：現代を生きる子どもは本当に苦しい時代を生きていると思う／LINEの長続き：これも単なる個人的な疑問／紅白歌合戦：μ'sって何？／「実写化」／学歴社会／高齢社会／領土問題：以前台湾で出会ったおばさんが「世界全体のものにすれば良い」と言っていたのを思い出して書いた。無理だとは思いますが今のままでも事態は永遠に収束しない。意見をすれ違わせたままで互いのより良い理解は可能か／選挙：SEALDsはまず若者を選挙に行かせる活動をしたら良いと思う／飲み会：個人的な意見にすぎない／英語教育：とって私自身が英語を話す事ができるわけでは全くない事を理解して頂きたい（英検2級しか取得していない）／孤独死問題：ただただ怖い／保育園・老人ホーム／詐欺／奨学金と風俗：中村淳彦氏による話題のルポから／原子力発電所：ただただ怖い／おっぱい

募金:フェミニストでも何でもなくてよくこんなイベントを開催できたなどただただ衝撃を受けた。〈日本〉と「性」に対する意識?は本当に面白いと思う／パチンコ／論文の書き方指導:切なる願い／美術の時間:想像力がこの時期に一気に失われたように感じるから／組み体操:怪我をさせてまで「団結」を示す必要はない／四ッ谷の交差点:本当に思いつかなくなって書いてしまった、単なる愚痴でしかない／COOLJAPAN／日本文化／ジャパノロジー:なんとかして終わりに持ち込みたかった。疲労の表れである。

(3)まとめと所感

自分の率直な思いを文字として表し、書き出すというこの制作は、その行動の単純さとは裏腹に、意外と時間も体力も気力も費やすものであった。結果としては特に得たものはなかった。今考えると、制作自体が特に奇を衒うものでもなく、また特に工夫を凝らしてはいないため初めから無駄な試みだったのでないかとも思う。しかし得たものも、たいしたものではないが、ある。第一に清々しい気分になった。大学生活において自分の考えを発する手段として与えられているレポートやテストという形式ではこのように率直な、くだらない思いを発することは不可能である。形式の自由を認められた「ジャパノロジー・ゼミ」だからこそ可能であったことである。改めて「〈日本〉を問う」というこの課題を通して、「自分は〈日本〉に対してどのような考えを持っているのか」「自分は〈日本〉の何に関心があるのか」といったことをこうした率直な形で現せたことはとても意義のあることであったとも思う。私自身は本来どちらかというと「石橋を叩きに叩いて渡る」人間であると自覚している。このような「(ある意味) 特にする意義のない」試みをするには人生においても初めてのことであった。しかしとても楽しかった。しかしおそらく、あえてこのような「挑戦」をすることは今後二度とないだろうと確信している。本当に疲れた。

余談にはなるがこの制作の背景には、昨年世間の注目を浴びた、現代アーティストである会田誠氏の作品、「檄」からの多少ならぬ影響がある。というかほぼ模倣に近いかもしれない。その意味でもこの制作には価値がないといっても良い。私自身はあの作品に非常に感銘を受けていたのだが、ただ「鑑賞する」というだけでなく、実際に「模倣し」体感するという機会を得ることができたのはとても良い経験であった。大きな紙に筆で「書く」という行為は本当に根気のいる作業である。会田氏の場合は6mにも渡る大きな作品であるから尚更のことである。やはりあの作品は会田氏の費やしたエネルギーの大きさを感じさせるすごい作品ではないかと改めて感じた。「鑑賞する」以外の別のアプロー

チから芸術というもののパワーを理解することができたことは思わぬ収穫であった。

繰り返すが、この制作は第三者にとっては特に意義も価値もないようなものだと思う。私自身の「あきらめ」の結果の産物であり、ただの「自己満足」の現れである。しかし、結論としては個人的に「この制作をして良かった」と感じていることだけは改めて述べておきたい。

紙の上では〈日本〉の非難ばかり行なっているが、やはり自分の生まれ育ったところである以上嫌いにはなれない。むしろ〈日本〉は本当に、本当に面白いところであると、この制作を通して、また「ジャパノロジー・ゼミ」を通して改めて感じた。これからも自分の方法で模索しながら、ジャパノロジーという奥の深い学問を、〈日本〉に関する自身の関心を追求していきたい。